

わが愛する歌

— 名歌鑑賞 —

二反田 實

気取りなく風が私を吹き抜ける偶然でない必然の結果

原田 寛（『太陽の舟』275号—13 p）

頬撫でしかぜのあるときひょっとして風になりたる君ふれしかと

山口クニエ（『清流』9集—37 p）

風とは何なのでしょう。この地球上に生きる全てのものに「風」とはいったい何なのでしょう。この目に見えぬ働きは又、何故「詩・歌・詞（うた）」と結び付くのでしょうか。一方は「太陽の舟」を代表する一人の歌であり、一方は太陽の舟購読会員で、「中日歌壇」にも多くの入選歌を持つ一人です。

男はいつも風のように、女はいつもそれを待つように、私共は皆「風」という空気の中に浮ぶ「塵」なのかもしれません、時々触れたり触ったりして人生の悲喜劇が始まるのかもしれない。それらは全て、気取りもなく、銜うこともなく、形も無い風に身体の中までも、心の中までも、まるで「ニュートリノ」のように音も無くすりぬけられて行く「必然」の中で、まるで夜中眠っている事を全く意識しないで過して居る様な、全てを委ねているその時に見る「夢」は、頬も撫で、言葉も交す「真の自由（心身脱落?）」の「風」と変幻しているのかも知れません。これら二首のように風そのものを自らに引付けて詠んでいる歌は意外に少なく、私には年齢を超えた美しい「若さ」があり、文学的な「自由」を身に付けているのではないかと感ずる歌でもあるのです。

口語調と文語調の二首でありながら、いずれも現代人の生命を感じます。

卷頭言

「悪魔退くる力なきものの行為の半は其身もまた悪魔なれば也。已に業に其身悪魔の行為なりて悪魔を退けんは難し」一九一三年八月一日、足尾鉋毒との闘いに命をかけた田中正造は日記に記し、翌日に倒れた。再び立てず九月四日に逝く。菅笠と合切袋一つをのこした。中には帝国憲法とマタイ伝を綴じたもの、渡良瀬川の石があった。

田中正造は三宅雄二郎宛書簡(明治三十七年一月二六日)のなかで「戦争の罪悪は論を要せず」として「戦争は必要なりとする事ありとするも、我國の内政の如き、公盜横行の政府にして妄りに忠直の人民を殺すことを敢てするものの戦争を奨励するに至りて言語道斷なり」と述べている。戦争は罪悪であり世界の軍備は全廃すべきである(正造翁談)とした思想は、「戦争は正義」とされた時代にあつてまことに偉大であつた、と言わざるを得ない。その田中正造に狂歌集がある。そのいくつかである。

人ハ皆桜のころになりけりうかれあつまる人の花山
 各々が我田に引ける水ほどのすめる心を持つ人ぞなき
 よの人のあわれをおもふ真心の尚つれなきぞ秋の夕ぐれ
 天が下見れば社会は面白し山田かかしも雪のたるまも
 足尾鉋毒事件に私財を擲つて闘ひ信玄袈ひとつ遺して逝つた田中正造に、世の中は面白い、山田のかかしも雪たるまもと詠んだ狂歌があつた。歌詠みは柔らかな心と同時に社会に對する厳しい批判の目を持たねばなるまい。

(松岡)

太陽の舟 目次

三十二卷 八月号(通卷三〇八号)

わが愛する歌 一名歌鑑賞――

二反田 實

卷頭言

松岡 三夫

二十五首詠

土屋 道子

阿部正路論(第一〇六回)

須藤 宏明

歌誌散見(第八十二回)

豊泉 豪

作品Ⅰ

高崎 邦彦 他

六月批評(作品Ⅰ)

宮島 マツエ

(作品Ⅱ)

鈴木 熹子

合 評(座談会)

角田 順子・土方 澄江

選者十首

酒向 一次・渡辺 幸子

秀歌抜芳(三〇六号)

高崎 邦彦

作品Ⅱ

井上萬里子 他

作歌の目・作歌の技法(第六十七回)

三木 勝

第十二回太陽の舟全国大会報告

三木 勝

全国大会受賞者十首詠

三木 勝

全国大会題詠二首

三木 勝

歌会・支部報告 他

三木 勝

編集後記

山田(紀)・照山・松岡

題字

阿部正路

表紙

イラスト 阿部正冬

「太陽の舟」の三十年

土屋道子

師も歌友もその生^う短^た歌の中にあり三百冊の歌誌潤みゆく

復刻の「太陽の舟」第一号四十余頁のずっしり重し

若きより師を慕ひしとふ中川昭の「無名の朱花」に引きこまれゆく

葡萄園も母も姉も失ひし悲しみ絞りて師の歌はあり

師の連載「野中古道」読み直す家持の心いたはりながら

万葉に又家持に止め刺^{とど}しし桓武なりとの師の声聞こゆ

歌会には知性高き人多かりき身を硬くして座りてゐたり

得点の少き吾の側に来て「良い歌だったよ」と石井氏懐かし

「お体は如何」と問へば微笑みて「もう駄目なんだ」と吾が顔見つめし

高遠の桜と師の碑に酔ひし旅初めて参加の大会なりし

伊那谷に籠る靈気を吸ひ上げて師の歌碑青く光りて凜々しき

この年まで創刊準備号続きゐてギネスブックと師は笑ひたり

病弱の都野正太氏の訃報あり夫人と共に会に尽くせし

萩に建ちし都野氏の歌碑のお祝ひに阿部師と共に旅立ち行きし

萩の夜は一つの部屋に師も歌友も集ひて都野氏の逝去惜しみぬ

会員の心一つに「太陽の舟」良き会にせむと誓ひし一夜

大いなる悲しみの日を迎えたり平成十三年六月のこと

師は逝けり阿部師は逝けりわれ等置きて。歌友に知らせる言葉無かりき

代表は高崎師受けて下さりぬ阿部師の心そのまゝの会

阿部師のため心も体も捧げたる高崎師の教へわが身に沁みゆく

九年経ち和やかな会続きをり益々充実の「太陽の舟」

三木先生、松岡先生、原田先生、良き師に恵まれ幸せの会

三百号見ずして逝きし歌友の顔一人一人を忍びて過ごす夜

進み来し道に間違ひ無かりけり八十路に入りしわが来し方の

良き歌と良き師良き友に巡り合ひし「太陽の舟」吾が宝物

阿部正路論（第百六回）

阿部正路論

須藤 宏明

— 写真から現実凝視へ —

戦後数年が経過した昭和二十六年、東京にある大学に在籍している学生たちを中心に「大学歌人会」が結成され、阿部正路はその中心メンバーとしてリーダーシップをとった。終戦直後、桑原武夫の「第二芸術―現代俳句について―」（「世界」昭和二十一年十一月）・「短歌の運命」（「八雲」昭和二十二年五月）、小野十三郎の「奴隸の韻律」（「八雲」昭和二十三年一月）など、あたかも伝統的な短歌という器が天皇制度と深く関わり、ために戦争を引き起こしたというような読みの印象を与える論が横行していた。その影響もあったのだろう、短歌創作に対する否定的状況の中で、鮎川信夫や吉本隆明などが中心となる〈荒地〉グループの現代詩が隆盛をはこっていた。このような文学表現の流動の中で、大学歌人会は結成された。この歌人会は若い情念を基底に置き、対社会と文学を問題にした。とりわけ、戦争、戦後という命題に対する感覚を鋭敏にしていた。このような気流にあって、彼らは昭和三十一年十二月八日、衆議院第三議員会館に於いて「短歌は現代文学に寄与し得るか」というテーマで第五回短歌討論会

をおこなった。このテーマが如実に示しているように、彼らは短歌という器、その表現方法、表現媒体が、社会の中で、どのような意味と力があるのかを試行錯誤していたのである。その試行を真摯に格闘していた。この試行は、社会に対して自己の思想や信条をいかに表現し、訴えていくのかという点に於いて、昭和初期から戦前のプロレタリア短歌の意志・意向と同じ質を有していると考えることができる。所謂、社会への主張としての短歌という手段である。

しかし、阿部の短歌に対する根底の思念は、短歌をこのような主張としての手段とは捉えていなかった。阿部は、短歌の根源を個の情念に置いている。阿部は、中野重治の有名な「お前は歌ふな」という「歌」という詩に対して、

僕らにとつて大事なことは、歌つてはならない対象を知ることよりも、僕らの内包する世界を如何に深め、如何に歌うかにある。特徴的なのは、その作品表出の方法が、所謂写真主義を完全超えつつあることだ。現実凝視の目が鋭ければ鋭い程、また、青春の把握が確かであればある程、従来の写真主義を超えずにはいられなかつたのだ。『集団の青春』（『青年大学歌人15人集』序文・大学歌人会・日本文芸社・昭和三十四年）

と、敬意を払った反駁をしている。阿部は歌うべき短歌の対象を社会に置くのではなく、自己の「内包する世界」に求めている。社会を写真することを超えて、現実凝視を核に置くことに、阿部の短歌に対する基本理念がある。短歌による凝視が、個の生き方を深めるという思惟である。

歌誌散見 第八十二回

豊泉 豪

「レ・パピエ・シアンⅡ」③

前号に続き、「レ・パピエ・シアンⅡ」十五号（二〇一〇年三月）、十六号（同四月）から短歌作品を鑑賞する。

・くろぐろと垂れてよこたふゆふ雲はうなものの果てにくれな
るを還す

角田 純

海の夕焼けを歌っている。雲の影が濃くなればなるほど空の紅が増し、日が水平線に沈むとともに、紅も沈んでいく。このような、ある意味ありふれた風景を、主観を一切交えずに歌って成功させるのはなかなか困難なことだが、この作では、わずかな時間のうちに展開される光と影、そして水が織り成すドラマを、下の句によって見事に切り取っている。

・枯れ枝を曲げるさなかに傷ついでしまう指 これくらしいのこと

小林久美子

枯れ枝を折り曲げているときに、思いがけず指が傷ついてしまった。恐らく血が出たのだろう。ただそれだけのことであるが、「これくらしいのこと」という、ぶっきらぼうに放り投げられたような結句に、わが身の果敢なさ、無防備さを嘆く作者の心情が表れる。不安で、ネガティブで、自身に対するいら立ちを伴った、かなしく、やりきれないような気分が感じ取れるように思う。「指」の後、句またがりに開けら

れた一文字のスペースが、作者のため息のようである。

・異国語を通して母語を再顧するとは言へくわう沙かかる幾
にち

酒向 明美

この歌の視線は、大きなものと小さなものの間を往還しつつ、世界の中での日本の歴史や、現代の国際情勢などへと向かうベクトルを秘めている。言葉や文化や人の往来を超えて、些か厄介な「くわう沙」黄砂」が何にも遮られることなく飛来する事実。「黄砂」とせずあえて意味を取り難い表記を用いることで、読む者に言葉と文字、異国（語）と母国（語）の問題を強く意識させる。同時に「とは言へ」という口語的な表現や、結句の時間の提示によって、一首が観念的なことから免れている。非常に技巧的な作であると思う。

・大きめのゴミ袋八つ膨らみてこれほどまでの個人情報

服部 一行

人事異動が決まった作者が、膨大な書類をシュレッダーにかけながら、「心憂し」と感じている。紙の無駄を気に病み、自分のやってきた仕事の徒労を思い、自身の思いが引き裂かれていく気持ちになる。同様の経験を持つ多くの職業人に共感される一連だろう。掲出歌はその最後の歌である。シュレッダーにかけられて大きく膨らんだ「個人情報」の残骸。本来の姿よりも桁違いに膨張したその様に、社会に対する作者の批判が込められているように思う。「これほどまでの」にもアイロニーが感じられる。「個人情報」ということば自体、無機質で嫌な言い方である、と筆者（豊泉）は思う。

六月批評（作品Ⅰ）

宮島マツエ

・眠うばふハクモクレンの開花なる早晩の庭の囁目の吟

多久和玲子

清々とした春暁のひととき、真っ白に咲き満ちたモクレンを愛でて、作者は朗々と吟詠される。誰も真似のできない世界を有し、神々しさの感じられる歌です。

・この日だけ伊豆半島が庭になる月に一度の日帰りの湯

森田 勝昭

月に一度、伊豆半島を庭園として出で湯の町に。宿泊をしなくても結構楽しめる。伊豆半島を借景にした比喩が、歌を大きくし、ゆたかな情緒を醸しだしています。

・眠れずに君の軒をきく今は倅ならむ ふっと安らぐ

玉川 愛子

傍らの軒で、今までは眠れぬ夜もあったが、考え直してみたら、軒の聞こえる事を倅に思うようになった。誰もなかなか到達できないこの境地になられた事は敬服の至りです。

・はらはらと南枝の梅々枝散り初めて北枝に雪つむ地球の跋行
手塚ミツエ

同じ木に同時刻、こうも珍しい現象を目にした作者。南側の梅の花は、はらはらと散っているのに、北側の枝や花には積雪が見える。自然の営みにつくづく感動した一首。
・ブランコより幼女木陰に走り来て白き帽子のひかりこぼし

ぬ

庄司 久恵

湿っぽい歌、重たい歌が多い中、唯一この歌だけは未来あるきらきら輝いた歌。ポエムがあり読み返すごとに、幼女の嬉しそうな表情がよく見え、童の頃を思い出させる。

・高齢を口に出さぬが小気味よし苦難越え来て達成感も

山田 玲子

高齢者だという言葉をも、務めて口に出さないように、心がけている作者。昭和という激動の時代を、生き抜いてきた事に満足し、充実した余生を送る作者に敬服します。

・下校時の降りみ降らずみなる雨に濡れつつ少年は平然とゆく

福地 啓子

胸中に何か思う事があれば、雨に気づかず、また気がついたとしても、少々の雨にはうろたえず、むしろ心地よさを感じる。濡れながら平然と歩く思春期の少年の堂々とした不気味さ。

・ポピュラーへ選曲変えて今日も子はうつつを治さむとピアノ弾きをり

塩田 秋子

心にうつを持たない人は皆無に等しいと思います。これだけ世の中が多様化し複雑な社会。医療機関と併行しながら、編曲のピアノを弾かれる等、参考にさせて戴きます。

・真剣に本を見つめる子らを見て吾やったりとほくそ笑みたり
高橋 和子

図書館で長年読み聞かせの、ボランティア活動をしている作者。本好きな子が増え、真剣に本を見つめる姿に喜びと感動を味わう。地道な積み重ねが功を奏した一首。

六月批評（作品Ⅱ）

鈴木 熹子

・筍の皮むきをれば故郷の亡母の面影しぐさ思ひ出つ

相羽 照代

故郷の筍の皮をむいた早春を思いながら妣と同じことをなさる作者の手元にやさしさが伝わり筍の料理は何かしらと思いつつ読める。

・スカイツリー東京タワーを越したとふ騒ぐは花見の人とマスコミ

浅見 時子

総武線からスカイツリーが東京タワーを越えた日に眺めた一人。一番を求める世相の中で作者は冷静に騒ぐ人の現代社会を詠む確かな眼差しに敬服。

・見てる間に貨物列車の通り過ぐもつと長々つながり走れよ生稲 進

昭和の長々と伸びた貨物列車に数詞を覚えたことを思い出す。現代はあつと言う間に過ぎる列車と比べ希望にもえた少年時代が浮かぶ一首。

・聞き違ひ些細な事に黙すふたり卓の山葵菜みどり鮮やか遠藤 剛

些細なことにこだわることの多くなるふたりの暮らしの体験は同感。食卓に手料理が並ぶ早春の山葵菜のさ緑は人の心を落着かせる至福の一品の輝き。

・次々と赤信号にひっかかる高齢なれば赤も吉とす

岡部千代松

走り続けて昭和の高度成長を支えた社会人にとって赤信号はイライラの種子だったのでしょ。今はゆったりと青信号

を待つ心境が結句に決った一首。

・こんもりと黄身盛りあがりつやつやの肌にも似たる今朝の目玉焼 黒羽 紘子

平凡な日常の朝食の体験を目玉焼きの黄身の盛り上がり生きる力やご自身の肌のつやまで詠まれる心の豊かさに感動。

・ひと冬を枝に乾びし柏の葉風に揺れつつ光を紡ぐ

小林 絢子

ゆずり葉には親心として伝える話がありますが、冬芽を守り春まで着いていて、子守りする柏の小枝に風の音や光のかげの揺れに気づく作者の繊細さは驚きの一首。

・わびしきは夕餉に酒無き休肝日「せめて美味」と冷蔵庫探る 小貫 昭

酒拔きの夕餉の物足りなさが冷蔵庫の冷氣に心をさびしにしたとのこと。酒をたつ決意と美味の誘惑とは平和な世相だからこそ一首。

・頑張れと老人には言うまい今日からは吾には解かる辛い言葉と 酒向 一次

「頑張れ!!」と応援されつつ生活を支えた昭和があり、自らも努力を重ねて老人となり今、頑張れと励ます善意の言葉も時には人を傷つけることになると思えられた哲人の一首に同感。

・先ず世界と国の未来の理想像明く描きて為すべきを決む

佐田 孝義

「世界と国と自分と」と表題に冠して七首を詠まれた一首。次々と変わる政治に平和を描いても不安の多い平成維新に作者の思惟と冷静さに引き寄せられた一首。

合評

座談会

司会 では、合評を始めます。今月は六月号掲載の中から四首選んで行います。まず最初は、大田支部の長沼温代会員の

一番の寒さとふ朝狭庭辺に霜柱踏む音の楽しき

です。どなたからでも如何でしょうか。

S この作者は横浜に住んでいらっしゃる方ですね。霜柱の立つ庭があるのは羨ましいです。作者が子供に返ったようだと思いますしわ。

H 子供に返る楽しさ、ですよ。大人には絶対無い。子供ごろが戻ったように楽しい歌だけど、一寸軽いかな。

T この歌は、結句の「音の楽しき」が良いかどうかの判断です。できるなら、ここまで言わずにこの雰囲気を出したいね。自分が霜柱を踏みながら、どんな行動を取ったのか、子供の頃の何かを思い出しているとか、の表現でもって「音の楽しき」をカバーしたいです。

Y 私も、「音の楽しき」でいいのかな、と思いましたけど、子供に返る楽しさが読み込まれているのだから、良いかなとも思いました。足裏楽しき、ではどうですか。

S 私の子供の頃の経験からすれば、霜柱を踏んだ時の足の裏に伝わる感触とサクサクという音が楽しかったし、思い出されますね。

T 誰もが経験している童心があるからこそ、私には物足りなさが残る。ここから一步踏出した表現を考えてそれが生まれた時、真実歌を作った喜びが生まれて来るのではないかと思うし、満足も得られるのではないのでしょうか。

司会 それでは、次は大磯支部の二宮裕子会員の
百本の桜トンネル散歩して疲れ癒され夢わきいでた
です。如何ですか。

T この歌は口語短歌ですから「夢わきいでた」は文語調なので、「夢がわきでた」としたい。歌い振りの素直さは良いと思う。

Y どんな夢がどのように湧きでたのかを詠むと、もっと良いと思いますね。

S 私も同感ですね。どんな夢なのか、具体的に読み込んでほしいです。百本もの桜並木を歩けたなんて、羨ましいです。なかなかないですね。どんなふうに癒されたのかその具象性がほしいですね。例えば、思ったより歩いて自信がついたとか。

H そう。どんな癒しなのか具体的に。例えば、もっと生きて行きたい、と勇気づけられたとか。癒しは勇気づけられることでもあるのだから。

Y 一首のなかに癒しや夢を具象として読み込むのは、なかなか難しい訳だけど、読者はそこを知りたいのだから、例えば、「百本の桜のトンネルくぐりつつ足弱忘れ明日またと思ふ」とかに、詠んでほしい。それから、「桜トンネル」という表現はどうでしょうか。字余りになっても良いから「桜のトンネル」と「の」をいれた方がいいのでは。

H 夢がわきいでた、というのは素晴らしいですよ。

Y 若者の歌みたいですね。

T この作者は半年振りの出詠ですが、是非、これからも続けて出詠してほしいですね。

司会 三首目は千葉支部の八代陽子会員の
春立ちていまだ冷たき風頬に沈丁花の香ふわり吹き抜く

です。Yさんからどうぞ。

Y この歌の主語が「風」なのか、「沈丁花の香」なのか一寸、分らないです。どっちつかずの感じがしますね。

T この歌は、「沈丁花の香」の後に「を」を入れれば、主体が「風」であることが明確になります。立春後の冷たい風は身に堪える。そんな時、風の運ぶ沈丁花の香をうまく取り入れていて、良い歌になっています。

Y 「風」が主語ならば、「ふわり吹き抜く」はおかしいので、「ふわり吹き寄す」の方が良いし、「沈丁花の香」が主語ならば原文通り、「ふわり吹き抜く」でいいと思いますけど。

司会 その通りですね。

H 私は、沈丁花の香が吹き抜くのだ、と詠んでいると思うけどね。でもやはり、「吹き抜く」が気になる。

Y 「風」を主語にして、「吹き寄す」と詠みたいのです。吹き抜ける、は自動詞だから「香を」吹き抜くのはおかしい。やはり、「風」が主体で香を吹き寄せるのが良いと思いますけど、どうでしょうか。

S そうですね。私も賛成ですね。

H 「類に」は一寸、甘い感じがする。「ふわり」は良いと思うので、そのまま生かして作り直しては。

T ここは「風」が「沈丁花の香を」「ふわり」と運び、そしてまたたく間に「吹き抜く」のです。そこに立春でありながら決して春を甘えさせてくれないこの時期の「風」の厳しさがある。その思いが「吹き抜く」だと理解します。

司会 四首目は、月の船支部の川村貴美会員の

たゆたへる思惟^{おもひ}捨つべし畳屋の跡地に明かたんばの咲くです。どなたからでもどうぞ。

H 「思惟^{おもひ}」は抽象的で、観念的だと思う。

T 「思惟」は振り仮名がなければ、「しい」と読む。意味としては、「念」も「想」も「おもい」と読むので、そちらの字でもあまり変らない。「たゆたう」おもいなら無理に思惟と書く必要はない。「べし」は助動詞で、意志（：しよう）、適当（：のがよい）、当然（：べきだ）等などの意味を持つが、この歌の場合は「意志」と取って良い。そんなに重く切ない思惟ではないと思います。

S 最近マンションをはじめ、洋間の家が多いので、畳屋は商売が成り立たなくなった、と聞きます。時勢が詠みとれますが、「たゆたへる思惟」と畳屋との関連性がわからないですね。

Y 「明かく」という表現は良いのかしら。伊豆支部の方の歌に「理想像^{あが}明く描きて」という表現をされていました。

H 「明し」は「光が充分にさしてかげりが無い」の意味だから、この歌の場合一番ふさわしい表現だと思う。

S そうね。ただ「捨つべし」という強い言葉を使っている割には「たゆたへる思惟」が読み手に伝わってこないですね。

Y 作者にはいろいろな想いがあるのでしょう。

H 例えば、この歌の上句と下句を逆にしてみたらわかり易いと思うね。上句に重い言葉を持ってくるより下句に持ってきた方がわかり易いね。

Y 私は上句はそれ程重い「おもい」ではないから、だからこそ下句の「明かく咲くたんば」で心が軽くなったの思いが伝わるので、これで良いと思います。

司会 本日はこれで終わります。ありがとうございました。

（記録 山田紀子）

選者 角田 順子

沢庵をぼりぼりと嘯む妻の傍娘と我と顔を見合はす

長須 正文

美術館の窓より望めば海原に白線長く引き行く船あり

工藤 和子

まわりの目気にし過ぎだよなぜなのさどうしてなのかわか

らないんだ 狐塚 秀子

こぼれつくなほ春雨に花添へてしだれる梅の美しきかな

二反田 實

歌会に見ゆることもあらずに才知にたけたる言葉も聞け

ず 木村 重夫

寒風の貫く中に線香を焚きて回忌を納むる如く

河口 礼子

春の風なぎたる夕べひやかにパンジーの花ゆらす霧雨

込山 千代

☆幸福は子、孫、曾孫集いたる未来につづく一筋の道

岡崎 くに

☆山鳩の声のびやかに往き来する風の松原春初々し

小林 絢子

咳き込みて喘ぐ呼吸となりにけり緊急入院心不全なる

奥田 清

選者 土方 澄江

ロケットで宇宙行き交ふ世になれど月に帰りしかぐや姫夢

む 庄司 久恵

シャボン玉ともに寄り添ひ吹けといふ幼児とわれに春の陽

の散る 末次 房江

この日だけ伊豆半島が庭になる月に一度の日帰りの湯

森田 勝昭

夜を徹し桜の根元に陣を取り上司らを待つ新入生らし

森本 元昭

經典を賜ふるとき両の手に創刊号の表紙絵見入る

諸 幸子

薄紅に杏子窓辺を咲きみちて吾娘みごもれよ花のごとくに

山名 恒子

箒星の降る音かすかに聞え来る水琴窟に耳を寄せれば

生稲 進

茜空見つつ呟く『寂しいね』気づけば朝よりひとり言のみ

岩橋千代子

先祖等に次男の購ひし花手向け吾が墓のみに春の訪ひ

河口 礼子

☆山鳩の声のびやかに往き来する風の松原春初々し

小林 絢子

選者 酒向 一次

実朝の靈宿るらむ大銀杏八〇〇年を語り続けて

杉山 榮子

春浅く曲る道路の角に立つカーブミラーに映る紅梅

菅谷 孝子

笑顔がいい凍てつく道におはようと応へてくる少女の二人

照山 好子

店先に「新」の字つけた春野菜太ぶりキャベツ一つ購う

富原 澄枝

だいふくを置いたるような今日の富士眠たくなるよう霞の

向こうに

森田 勝昭

昔から緊張感が好きだった本を読む前映画を観る前

吉田 律子

日向灘の岬の断崖切り立ちて鳶びゅうひゆる激しく鳴き飛

ぶ

渡辺 幸子

筍の皮もて三角包みする梅干入れて赤らむを待つ

相羽 照代

バス電車乗り継ぎて行く月一の通院なぜか傘の日多し

岡部千代松

伝えしに家族こそりて抗がえり命を辞するか單身赴任

北川 昭

選者 渡辺 幸子

人のいのち看とる仕事を選びしは戦時を耐へし源なれば

山田 玲子

健やかに春めぐり来て今年また同じ場所にて蓬摘み居り

菅谷 孝子

日替りの天気秋田またふぶき春への律動単調ならず

土橋 茂徳

山は少し春のきざしか薄白くぬぶたきほどにやはらかきか

な 二反田 實

朝もやに鶯鳴きし裏山のいつの間整うリズムのありて

土方 澄江

薄ら雪積もりし加波山一幅は水墨画のごと朝の陽光に

深谷 充代

山深く落葉をくぐるせせらぎの水の冷たさを潤す

丸山孝一郎

太陽の舟、礎定め賜ひたる先人に謝し歌誌を読みつぐ

諸 幸子

☆幸福は子、孫、曾孫集いたる未来につづく一筋の道

岡崎 くに

肩の力抜いて抜いてさ生きてみなわたしはわたしそれだけ

のこと

狐塚 秀子

母親の形見の着物携へて食料に換ふわれ小学生

山田 玲子

それぞれに戦前があり、戦中があり、そして戦後がある。戦後二年目に団塊の世代の洗礼を受けて生まれた私も、もう還暦を過ぎた。戦前を知る者はもうほとんど居なくなつた。だからこそ、自らの戦中体験を語る営為は大切だ、現代はボタン戦争だと言いながら、イラクやアフガンや世界の多くの国で、日本人の経験したと同じ戦争が止む事は無い。大国のエゴが生み出した醜惡な戦争。それを阻止出来るのは、国民一人一人の反戦の意志以外に無い。その意志こそは、歌人一人一人が自らの戦争を詠うことだと私は思う。その意味で、山田玲子同人の「戦時を語り継ぐ」二十五首は尊い。幼くして母を失い、父との流離の果てに雪深い信濃で小学生から女学校までを父と生きた苦難。それは戦争がもたらした苦難。小学生の作者に何の責任があろう。しかし受難は等しく、否、善良で弱者程深く激しい。拔芳歌、善良な父と生きる為、母の形見の着物まで手離せねばならぬ悲しみは、思うだに心が痛い。真実を事実を淡々と感情を押えながら詠み込んだからこそ、事実が情緒に流れなかった。これを詠うまでに長い時間が必要であつたろう事は想像に難くない。掉尾の一

首「雪解けの信濃の春は美しき杏あんずの花の甘き香りの」が美しく悲しい。

姉の忌の紫紺の空に朝の月雨戸を繰りて手を合わせお

鈴木 薫子

「妣（ひ）」は死んだ母を言う。だから「はは」と読む。忌があるから二重の表現の様に思うが、それ程に作者の中に母の死を確認する作業は深く重いのであろう。早朝の空の色を紫紺と表現して日の出のいまだしをうまく表現した。だからこそ、月は有明月では無くまだ明かりを失っていない。その事が結句の「手を合わせおり」をより深いものとして澄明な世界を表現した。

弥生月吾の誕生の雛の宵九十五歳の生命貫き

谷河 ひさ

来年の全国大会は大磯で開催する事となった。谷河さんは太陽の舟発足当初からの会員、岸田君と親交が深かった。雛の宵に九十五歳の誕生日を迎えられた事は慶賀に堪えない。何に拘泥する事も無く自由に歌を詠んでおられる姿に心から敬服する。拔芳歌はそんな歌い振りそのままに歌い上げた。特に結句「生命貫き」が私の心に深く深く沁みた。来年全国大会でお会いしましょう。

蝋燭の芯燃えつきて蝋の露搔き集めてももう灯は燃えぬ

梅野 落

前々号 (306 号) 秀歌拔芳

五月号に愛犬ピコの死を間近にした悲しみを詠んでいた作者。愛犬ピコは遂に亡くなってしまった。その悲しみは「喪章」の三首に凝縮されて深い。ピコを失った悲しみは再び夫を失った悲しみを呼び起こしその辛さは拡大する。拔芳歌は思いきろうとして思い切れぬ悲しみを蠟燭の蠟に仮託してやるせない。「いかにして明日に向かい生きよとやわれを支えの支柱は無きに」一転した直截の慟哭は、前歌と響き合い読者を魅了する。

幼児をなだめるやうな声のする老女と犬の奥座敷より

原武 寿子

アニマルセラピーと言う言葉がある。特に犬にその効用は顕著である様に思われる。私は昔から動物を飼った事は無いので、犬も猫も興味は無かった。しかし義父を見てみると、正に犬に生かされているとしか思えない。本人もこれが居るから生きていると常々言う。そのかわいがり様と犬の反応を見ていると言葉も通じ気持ちの通じているのが分かる。言葉は幼児語。拔芳歌は家の奥座敷から聞こえる老女の声。きっと生き生きとしているに違いない。不思議な世界だ。

住む人の絶えし隣家の白き梅静かに咲きて雨に散り數く

深谷 充代

無住の家は、家そのものが寂しさを語ってやま

ない。今日田舎には多く無住の家があり、自然に抗うように朽ち果てて行く。そんな中、植物の生命力が際立って雄々しく見える。拔芳歌同じ生命力でも白梅の楚々とした清らかさが、別の意味で無住の家の寂しさを語る。誰にも愛でられぬまま雨に散る梅の花。やがてその梅の木も朽ちて行くのであろうか。

如月のお社やしろ日に日に嵩を増し絵馬のいななき夕映えの中

宮島マツエ

日本人の宗教観の融通無碍を私は愛する。多神教であるがゆえに他者の宗教に深く関与する事を自他共に求めない。拔芳歌、合格祈願の絵馬で神社そのものが嵩を増して行く様に感じると言う。それは決して絵馬の数だけでは無い。絵馬に託した人々の想いの丈の大きさでもある。作者はそんな日本人の心の有り様を決して否定してはいない。それも又ありだとやさしく見守っているのだ。

この日だけ伊豆半島が庭になる月に一度の日帰りの湯

森田 勝昭

結句が六字である事が難点であるが、歌柄の大きさを拔芳した。結句の字足らずは出来る限り避けたものだ。月に一度の日帰り温泉へ行く。場所も具体的には書いてないのでイメージは結び難い。しかし伊豆半島がその温泉から見ると庭の

様に見える雄大な場所。作者は伊豆に住んで伊豆を熟知しているからこそ言い切れる絶景。私も行って見てみたい。

上京の孫を無視して吾の自由友人四人と京都に遊ぶ

吉岡悠紀子

それは「冷蔵庫冷凍室までぎっしりと肉類詰めて孫を待ちをり」程に待ち焦がれていた孫。しかしそれはそれ、私は自由人なんだと、孫を置いて友人と京都旅行に行く。私は作者のこの自由人としての生き様を愛する。自由人として生きる事は難かしい。相手に認めさせる気配りが無ければならぬから。作者にはそれがある。だから歌が生き生きとして暖かい。

アリス達遠くで汽笛を聞き乍ら逆境生きる人らを歌う

吉田 律子

「青春」と題する七首、真実共感しながら読ませてもらった。私も真央ちゃんが大好きで、結果がわからなければテレビも見れない。埼玉アリーナへ見にも行った。本が好き。映画が好き。太陽がいっぱいも見た。アリスも好き。堀内孝雄のコンサートも行った。この中に私の青春も一杯入っている。青春とは摩訶不思議。共感するものなのだとしみじみ思った。

野性猿糧を求めて現れし花も供物もばらに散る

伊藤 モト

私の家の庭を時々野性の猿が走る。庭に実の生る物は植えられない。妻の実家の畑、ハウス、ミカン、柿皆猿に荒らされて、今年はミカンも柿も駄目らしい。彼らが去った後は本当に食い散らかしてきれいに食べない。それは腹が立つ。しかし彼等にも言い分があるだろう。いつの間にか私達人間は巨大になりすぎた。作者はその事を内に秘めて歌を詠んだ。

老いたりといへども女よ出かけゆく日はせめてもの紅などつけむ

岩橋千代子

「寂しいね」と題する七首、緊張感のある良い歌群だった。短歌は生きる大きな力になるのだと実感し、作者の生き方に心からの声援を送りたいと思った。拔芳歌、独り言のみの日々から、自分の外に動く気配の無い家から出る時の心の弾みを詠んで楽しい。その生き生きとした様がうれしい。どんどんと外出し、化粧し、短歌を沢山詠んでほしい。

子供とは女の命と思ひしに餓死虐待と親の悲しさ

江面 伸子

最近、特に子殺しのニュースが多い。子供を持てば子供がかわいいと思うのは、動物の本能であり、人間を含むあらゆる動物に共通のものである。

前々号 (306 号) 秀歌拔芳

それでも子殺しをする女の何と多い事か。拔芳歌の凄さは、女では無く「親」の悲しさと結んだ事だ。本能を打ち砕く程の親の悲しさ、現代人に架せられた孤独は親になって耐えられない程に強くなる。親とは本能ではない。

咲き初むる桜の花も見ず逝きし言つつしみて焼香をす
ます
木村 重夫

千葉支部の堀井さんへの挽歌。本当に短歌が好きだった。何があっても歌会に出たいと、病身をおして出席し、「歌会へ来るのが今の私の生き甲斐です」とまで言って笑っていた堀井さん。支部の人達の無念さは拔芳歌の通りであり、哀悼の気持ちは七首の通りだ。私達は堀井さんの無念を心に歌に精進しようと思う。

何度でもリセット出来る人生は軽いくらいよ自分の為に
狐塚 秀子

「人生の応援歌」と題する七首、全て分かっている、そう出来れば苦労は無いさと別の私がふてくされている、そんな二重写しの作者が見える歌群である。拔芳歌も含めて全て自分自身への応援歌である事は言うまでも無い。逆に言えばこの逆が今の作者であると言う事になる。この中の一首一首が決して難しく無いのに誰もが何かにこだわってこの様に割り切れなくて苦しんでいる。決

して君だけじゃないよ。と言ってやりたい。僕もなんだ。

幼あり老いあり中年の女性ありてさまざまなりき散歩
道の音
込山 千代

私の散歩コースは決まっている。鑑畑地区の田圃道を歩く。田も土手も手入れがゆき届き静かで気持ちの良いコースだ。拔芳歌の様に沢山の音に囲まれながら歩く事は無い。聞こえるのは鳥の声だけ。それだけに拔芳歌の結句「散歩道の音」が面白い。それも共に歩く人間達の音。話し声だけではあるまい。歩く時に出る音。元氣な足音、物静かな足音、弱々しい足音、跳ねる様な足音、案外楽しい散歩道ではないか。

山を背に建つ家の縁にもの読める老人の背を冬日温た
む
近藤 リイ

老人とは誰であろうか。今私の住んでいる部落にも一軒だけボツンと山を背にと言うより、山に抱かれる様に家が建っている。昨年はその家の前の田に沢山のホタルが舞った。都会から来た別荘暮らしの人が、家の前にベンチを置いてその山と家を見ているのが好きと言った。拔芳歌の老人は至福の時を楽しんでいる。縁側の冬日はさぞ温かい事だろう。私達全ての夢の一つの形であるとも言えよう。

作歌の目・作歌の技法(第六十七回)

作歌の技法(連歌編)

三木 勝

連歌は、共同で作るものである。連歌で、最も大切なことは、共同で作るといふその共同性にある。連歌を作る者は、その共同性を楽しむ。共同性を楽しむことが、連歌の最大の目的である。情感の融合とその分かち合いが、連歌の目的であり、連歌の持つ機能である。

連歌は、チームプレイであり、チームワークである。連歌を体験したことのない方は連歌をやろうと誘われると、大方において遠慮される。それは連歌作りを経験したことが無く、共同で歌を作るといふことの感触が掴めず不安を感じるからである。近代において和歌は、短歌が主流となり、和歌の制作は個人の作業が主流となった。歌会においても、個の力は競うものとなり、個的作品の評価の上下を重く見るものとなっていった。このような環境の中では、個と個性が、共同性よりも優位に置かれ優先される。

チームプレイであり、チームワークである連歌の中では、この個と個性が消えていくのである。個と個性を放棄してチームのために働くとき、チームへの貢献を通して、個と個性は、再び浮上してくる。それは、個個に分断された近代的個ではなく、連係プレイの中に組み込まれた部分としての個であり

個性である。共同作業の中で、共にいることを喜び、その喜びを分かち合う。このために個と個性は奉仕する。個は、全体に奉仕することによって、個性を活かすことができる。この喜びを自覚することが、連歌における作歌の技法の第一歩と言えるであろう。共にいること、共時共存在の喜びが、すべてに優先するならば、作品の良し悪しは、二の次になるであろう。

連歌は、まずは共にいることである。そして連歌は、即興的である。自分の前の読み手が、どのように読むかは、読まれるまでは分からないので、前もって歌を準備していても、前の読み手にあわせて、変更せざるを得ない。そこに即興性があり、その即興性が、気持ちの上でのつながりを生み出していくのである。即興性を楽しみ、気持ちの上でのつながりを楽しむことが、共同性を生み出していく。それ故に気持ちのつながりを楽しもうと言う指向性を自覚的に持つことも、連歌における作歌の技法のひとつである。

気持ちのつながりを楽しむということは、ゲームであり、遊戯である。一連の連歌を形成していく過程には、争いや競い合いはない。そこにあるのは、近代的な孤立した個や個性ではなく、全体の中の部分としての個や個性である。

このことは、連歌作りがゲームで、連歌作りに遊び戯れることによって、全体の中の部分であることの意味と喜びを学習できることを意味する。故に、連歌作りに遊び戯れることの自覚も、連歌作りの技法として、大切である。

第十二回 太陽の舟短歌会 全国大会報告

松本 昭子

平成二十二年全国大会は六月二十七日(日)二十八日(月)の二日間に亘って那須塩原の明賀屋本館において開催された。初日は折悪しく雨となったが、予定通りTEPCO塩原ランド、からくり時計、もみじ谷大吊橋、漱石・谷崎など文人墨客ゆかりの妙雲寺などを見学したあと、宿の明賀屋に着くや役員会にひき続き講演会。二日目は歌会と表彰式と運営懇談会。出詠五十七首、出席四十六名を得た今大会は成功裡に終えることができた。

第一日目(六月二十七日)

生憎の雨だった。午前十一時北から南から四十六名の会員が那須塩原に集合した。月の船支部の松本昭子実行委員長代行をはじめ伊藤モト事務局長ほか狐塚秀子会員らが出迎える。賑やかに久闊を叙しながらバスに乗り込む。雨の中バスは林檎庵へと走る。十一時三十分から十二時三十分まで昼食。名物の蕎麦などに舌鼓をうったあとテプロ塩原ランドに向かう。ここでは水力発電の「塩原発電所」(揚水式)の仕組みを模型や音や映像で分かりやすく学ぶ事ができた。そして丁度一時「からくり時計」の人形がメロディに乗って踊り

出してきたのを一同ほほうと見入る。郷土資料館には昔の農機具などが並べられていた。再びバスは雨中を走行。予定の回顧の吊り橋に変えて日本一の吊橋全長三二〇メートルのもみじ谷大吊橋を訪ねる。傘をさして何人かの人が渡る。雨の湖面も風情ありと眺める人もいた。バスに戻って最後の見学である妙雲寺を訪ねた。八〇〇年の歴史を有する妙雲寺は、平重盛の妹妙雲禅尼が開祖といわれる由緒



ある臨濟宗の寺。山内には、夏目漱石、谷崎潤一郎の碑や斎藤茂吉、会津八一の歌碑が建っている。熱心にメモしている人も。芭蕉の「初時雨」の句碑も山門の傍の草陰にあった。

見学を終えて雨も止みかけた三時ごろ明賀屋本館に到着。チェック・インしてまもなくの三時十五分、役員会。各受賞者の確認と会員増加にむけての提案があった。四時四〇分より講演会が始まる。演題は「二九歳





賑やかに締めくくった。

八時三〇分より企画広報役員会。

原田同人第一歌集「ピエロの影」を一〇〇〇円にて頒布。

第二日目（六月二十八日）

朝から晴れ渡った好天気。昨日と入れ替わってくれば良かったのに、と言い合う。

七時からの朝食のあと八時十五分から歌会が太古館一階会議室で開催された。司会進行は十一時四十五分までを原田寛本部事務局長が担当、昼食をはさんで十二時四十分から一時四十分までは三木勝部長で、一首ずつ選をした二名、しなかった一名、編集長、代表の評を経て作者弁と進められ厳しくも時には笑い声も上がり和やかな歌会であった。高得点者はつぎの通り。

第一位

まばたかず紅さす吾を見つめる老母の脳の正気を探る

富永 道子

第二位

物忘れ今日の迂闊を数へるてたそがれどきの寂しさに居る

志賀 倭子

第三位

街路樹のあはひ連なる石灯籠 知覧の街に兵をしのびぬ

久保田昭江

表彰式 右の方々にそれぞれ賞が贈られた

太陽の舟賞

功労賞

原田 寛

努力賞

丸山孝一郎

吉岡悠紀子

塚本 正子

諸 幸子

狐塚 秀子

富永 道子

北川 昭

町田久美子

岩橋千代子

富永 道子

志賀 倭子

久保田昭江

新人賞

代表者賞

文芸館賞

高得点者賞

第一位

第二位

第三位

運営懇談会

松岡編集長の司会で、役員会の報告として、会員増加のために①「太陽の舟」の誌質向上②口コミによる会員獲得の数値目標を各支部で設定することが提案され、各支部長から意見を伺い、特に今大会担当の月の船支部の各位から感想と意見を伺っ

た。活発な意見が出された。

北川会計係から、会員減員に依り財政状況がやや苦しい状況にあることが説明された。その意味から会員増加の努力が必要である、とのことであった。

企画広報部からホームページの活用と吟行会実施の提案がされた。

最後に、高崎代表から今大会が例年のごとく成功であったとの講評があり、これも月の船支部のご尽力によるものと謝辞があり、来年の大磯大会に向けて努力したいと閉会の挨拶があった。

午後三時閉会。三時一五分、バスは明賀屋をあとに那須塩原駅にむかった。



全国大会受賞者 十首

太陽の舟賞

原田 寛

夏の宵寂しい影をまよって小石と遊ぶゆるやかな足どり
剃刀で左の小指に傷付けた甘い意識が変化してゆく
長い尾を垂直に立て闊歩するかび臭い昼おぼろな街路
日暮れにはまだ早い道老い猫に追従していく透明な影
闇の暗全ての色を含んでる 写真館の写真少女の幻影
夏草が寂しくなった 一日がもうすぐ終る月影白
町角を一つ曲がった手袋が路面に片っぽ干物の姿
内外をへだてる扉一枚の汚れた鏡静かに固い
しつとりと濡れてる眼その暗さ心の土を掘り下げている
ささやかな二人は距離を測ってる私と私卑屈な存在

功労賞

丸山 孝一郎

地底には自然の装飾連なりて悠久の時を鍾乳石刻む
階段を登りて見下ろす地底湖の透き通る水青く光りて(宮手龍泉洞)
露出した石灰岩の地底には石化の樹林蝙蝠の羽音(福島阿武隈洞)
仏の名付けし石筍ここかしこ僧の修行地いま観光(群馬不二洞)
垂れ下がる鍾乳石や石筍の驚異の地底孫ら喜ぶ(東京日原洞)
洞内は水塊の山震えるに外は真夏のゆだる暑さが(富士水穴)
地の底で三十メートルの滝を見る一人の執念穴を掘り当て(浜松竜が岩洞)
草原に白い岩あり秋吉台地下に巨大な穴を隠して(山口秋芳洞)
洞窟に土器と地面がくっついた鍾乳石あり人住みし跡(高知龍河洞)
さんごから出来た無数の鍾乳石幾千の槍天より下がる(沖縄玉泉洞)

功労賞

吉岡 悠紀子

健康の幸をかみしめ友の待つ五反田駅へ汗出し歩く
大会の那須塩原へ品川の三人揃ひ車中の人に
狐塚さん初めて会ふも旧知のごとメールに感謝時代に感謝
緑濃き那須路を走り赤松にマタタビもある多彩を眺む
誌上のみ顔の知らない友に会ひ話はすむ大会の夜
深きよみ吾には出来ず表面を生きるのみの八十年か
思ひかけず功労賞を頂きて備せぬ吾に恥ぢ入る思い
代表の色紙と共に賞状を夫に供へてしばし語りぬ
歌下手で黒子に徹す気持にもやはり努力し歌を詠みたし
来年も参加したきの喜びで那須塩原の大会終る

努力賞

塚本 正子

一万本の桜咲き満つ松前の花の盛りに会ひしあはせ
鯨御殿と言はれし家に人の住む 黒光りする梁も柱も
細長き家の土間ゆく蔵もあり海に通じし奥に行き着く
三本のマストは江差の空を突き開陽丸の威厳みなぎる
船内のハンモックに寝る兵士等の人形若し 砲声きこゆ
打ち寄せし波の作りし奇岩立つ鍋釣り岩の頭上の樹木
慰霊碑のくぼみの中に日の沈む黒き器ともオブジェにも見ゆ(奥尻)
慰霊碑は津波の恐怖顕すか回りに刻みし死者名あまた(二九八名)
津波館は島民の記憶残したりM7・8の地震と津波
職員の女との奇遇十七まで住みし流山懐かしと笑む

努力賞

諸 幸 子

大会の空気を吸はむまみえたき八十路の脳智の灯まほしく
大会に参加を決めて狭心症発作出ぬやう祈りの日々を

この朝不整脈あるも目眩無きこころ平に心経唱ふ

“行ってきます”てのひら合はす仏前に幽か聴りけり “大丈夫だよ”

妙雲寺のゆかりを読みて堂内にいにしえしのび釈迦像拝す

杖を頼り雨中に仰ぐ常楽の滝たがり落ち精氣まとへる

大会の活氣満ち充つ後退の脳に絆のマイナスイオン授かる

全国大会参加を叶へ言の葉に余れる幸を教ひをたぶる

来年は大磯といふ恐々と今年を叶へもしやもしやに

はまゆふの白くふたもとかはたれを帰りし庭にひらきておりぬ

努力賞

狐 塚 秀 子

きみの言う愛のひとつとゆらりゆらゆらめきながらのみこまれゆく

愛してるそのひとことが言えなくて過ぎ去りし日々モノクロとなる

愛なのか憧れなのか分からずにただきみだけをみつめていた日

きみに舞いきみに漂よい寄り添いて夢に目覚めし下弦の月

青き日のきみへのおもい海に似て白き海原われを飲み込みゆく

初恋の想い愛しさ溢れいで卒業できぬきみとの距離

触れもせずきみと見ていた冬の海いつかは来ると春の訪れ

切なさもたゆたう日々の愛しさもきみに向う唯真っ直ぐに

好きだからきみに負けじと背伸びする十年二十年これから先も

束の間のきみとの逢瀬胸に秘めこころに明り灯していたり

新人賞

富 永 道 子

相對し腕を伏せたる屋久島と置きたる芋の種子島の形

濃紺の屋久島見ゆる晴れの日はガジュマルの風空に消へゆく

ガジュマルの説明板は父の字と知りてひそかな悦びとせし

ガジュマルの氣根見上ぐる人の声聞きつつ父は蘇鉄をいぢる

ターザンを真似て遊びし友も古い墓に新たな名の友もあり

がじゅまるの落葉を朝夕掃きし婆享年百歳新聞に載る

二十二歳で逝きし弟と八十二歳の父に会へしか九十歳の母

ようやくに続けむ意起きたるに大会の雨詠草ぬらす

つり橋に些と浮かれるし時も亡母そばに居たるや選歌の賞受く

われに合ふ言の葉綴り声にして「太陽の舟」新人賞くるる

新人賞

北 川 昭

現役とリタイヤ組の入り混じり生きざま晒す同期の集い

責めらるることなき今は自を晒す思い出として語り得る夜に

思い出を心の頼りに語り合う六十路を迎えそれぞれの過去

同級の友の逝きたる便りあり次の会合日時早めり

集いきて残す写真にひとときのにぎわい見せる別れの間際

「これまでに辞世ならざるものはなし」今日を限りの芭蕉の覚悟

いくつものを趣くままに過ごしけり今日を限りの覚悟を抱き

散る花はただに過ぎゆくときの間に愛惜つるの限りなきまで

もろげなる花の散りゆく様見つて我の命も限りのあらん

それぞれに人の一生や何あらん今ここ生きるを思い定めや

代表者賞

町田 久美子

学童の列を見送る老犬がお印でいど尾を振っている朝
椅子に立ち誓いのように伸ばす手が無言のままの電球換える
雷が音をくねらせ去って行くうじうじしている男のように
父の居た正月の空 凜とせし雑煮の餅を底に閉じこむ
雨上がりほとりと屋根にこぶし乗せ巡回バスが次へと向かう
柵の棘があるのを知りながらひねくれ者のミミズがとおる
理髪師のハサミの中で切られてく彼の脳裡の褪せたる故郷
庭に咲く花の世話する人を今朝デイサービスのバスが迎える
割引のシールが貼られた食材がセルフのレジにて重なり合う夜
裏通りハンカチくらいの暖簾ある呑み屋の灯りにエールをおくる

文芸館賞

岩橋 千代子

変化なき日々にしあればたまさかの旅に出る日の目覚めは早し
常のごと逝きたる人の席もあり会終るまで山百合匂ふ
生垣の扇骨木紅色つややかに花とも見えて季を誇れる
黒み帯ぶ朱は血の色木瓜見つ遠くなりたるいくさ日想ふ
若き日と変らぬ気持に水を差す名前の下の年齢欄は
焦りゐるつもりなければ人待つに五分は長し待つ間の自省
足運びゆるりとなりしも詮なきかせて背伸ばし老い退けむ
負ふものか味はふべきか淋しさは気づけばいつも傍にあり
君在しし時と変わらずこの季節鳥あまた来て狭庭賑はふ
無理するな齢を思への娘の言葉かつては妣に言ひたるものを

高得点者賞 二位

志賀 倭子

近隣の古き豪邸毀たれて視界開かれ見慣れぬ景色
豪邸の醸す雰囲気堀越へに伸びて頭に触る枝も愛でるし
屋敷林無惨に伐られシヨベルカーに掘り下げられし樹根に掌合はす
広き更地を縦横に馳けたるキャタピラーの軌道の後の小さき月影
半世紀の変遷速きに付きゆけぬ吾れの脳は過去遡る
父はも家族も通りし豪邸と同じ道路も土から舗装路
何時しかに代替はりつつ表札の姓は変らぬ近隣住宅
未来図は示されぬままブルーシートに覆はれし土何を夢見る
あの世から亡き父母、夫も見ますらむ住み慣れし近隣変りゆくさま
広き更地一杯に建つマンションの虚空突くさま幻に見つ

高得点者賞 三位

久保田 昭江

これの世の何の運命か平らかな池に突如の岩なげ込まる
能楽の道一筋に究はみたる関根祥人氏五十歳に逝く
縁ありテニスコートロマンスの結ばれれ人生の出発なせし
伝統の旧き家柄護りつつ一女一男の親となる姪
胸熱き夫に傳き子を守り早や二十年余の歳月も経し
義父上の厳しい躰と励ましに伝承の責負ひし夫なり
過ぐる日に芸術祭の新人賞 松尾芸能賞受く榮譽あり
上海の万博祭に招かれて「船弁慶」のシテを舞ひしも
新年の賀状は常にクイズなり常に考へ他人樂します人
追悼の実父の言葉胸をつく「息子にせし如く孫にかかはる」

全国大会題詠「雨・橋」二首

相羽 照代

五月雨のそぼ降る雨に雲湧けり美しき哉那須の山脈
大吊橋ゆうらゆらして橋板の間より親子の鴨小さかり

伊藤 藤モト

梅雨さ中バス待つ間にも汗の出で微かな風に安らぎを得し
もみじ谷吊橋渡る人眺む雨ちらほらと傘の花咲く

岩橋 千代子

梅雨さなか歌人の碑を求めゆく妙雲寺の庭足許暗し
緑濃き山に伸びたる吊橋を友らは渡るいとまたやすく

石塚 立子

山あひに光はそそぎ青梅雨の止み間いつせいに松蟬の鳴く
湖を渡る吊橋とほく揺れかすかなるもの霧となりゆく

上田 やい子

透明な六月の雨音もなく緑の谷へ吸い込まれてゆく
雨煙る紅葉吊橋歌人を乗せて優しやゆりかごとなる

北川 昭

惑ううち雨激しきに立ち尽くす進むべき路選べとごとく
揺らぐ橋峰の高くて谷深しどちらの路や我の行く末

久保田 昭江

去年一年下水道工事の終了し「雨降らば降れ」の心境にあり
塩原の大吊橋を背景に記念写真の台に背伸びす

黒羽 紘子

したたかの雨に打たれし紫陽花の枝垂れしままに花は真盛る
紅の傘さし渡る吊橋のわが胸ふかく満つるものあり

狐塚 秀子

人生も吊橋に似て揺らいでる危険に一步踏み出すとき
雨音に心委ねし旅先にまだ見ぬ友を心待ちにせり

志賀 倭子

雨足は降りみ降らずみ傘持たずバス下りて行く観光の旅
橋幾つ架けて流るる川ならむ瀬音白波太古のまに

末次 房江

妙雲寺のきざはしに雨かと驚きぬ水音すがしき滝のありたり
高き架橋渡らば日照り雨の降るなつかしき邑あるやも知れず

杉山 直子

雨脚の激しくなりし宿坊のトタン屋根打つ雨音怯え
溪空のいずることなき吊橋に人の歩みにゆらしゆれけり

高崎 邦彦

雨を宿り道に憩ひし大木の倒れて荒野に濡れそぼちをり
阿部大人に導かれゆく吊橋の揺れ止ざりて道半ばなり

多久和 玲子

視野しめて続く塩原の早苗田に音なく吸はるみなづきの雨
バスの窓に谿谷の靄せまり来て大吊橋の行方の見えす

武田 節子

梅雨の日中生き生きと咲く紫陽花に遭へば広ぐる心晴れ晴れ
錦川跨ぐ五連のアーチ橋夢に歌友等と師の姿追ふ

角田 順子

雨の中那須岳ながむ墨絵なる山のふもとに山帽子の白
もみじ谷帯川渡る大吊橋雨降る中を傘さし歩む

照山 好子

じつくりと大会の歌読み返す作者も見えぬ雨の日の午後
うきたちて大吊橋を渡りたる満目緑塩原の地に

富永 道子

どしゃぶりを聞き取る脳乱れたる落葉焚かむと立ち上がる母
たわむれに揺さ振りてみむ吊橋に歌友等真っ直ぐ終点めざす

富原 澄枝

五月雨の文学の森旅人は八一の歌碑のひらがなを追う
水の月那須塩原へ短歌旅大吊橋を漸う渡る

つゆ晴れず御堂のなかを彷徨えば茂吉の歌の濡れてかすかに
つり橋の梅雨で増水あふれいて渡る人みなこわごわ歩く

永野昌子

雨間待つ青山かすむ塩原の集ひし者の歌こころかな
つりはしに心ゆらぎ身もゆれて相会ふ岸のかすみ立ち待つ

一三反田 実

夜どほしの雨の上がりて塩原の谿谷に咲く山ぼうし光る
山の気を胸の奥まで吸ひ込みて大吊橋をかるやかに行く

原武寿子

石を打つ雨音確か 居酒屋で故里想う言葉を捜す
炎天に蟻の行列橋の上何事もなく過去になりゆく

原田 寛

雨女今年も居ました歌会なり古刹妙雲寺数多の句碑会う
塩原の回顧り吊橋足震え波紋寄り合う川面に両足

土方澄江

寺庭の滝のしぶきを浴びながら雨止む束の間疲れ癒す
ゆさゆさと揺るる吊橋歌友渡る足の疎みて我は見送る

深谷 充代

けむりつつ那須の山脈はなりゆく新幹線の窓濡らす雨
つり橋を渡りて行けば人の住む里のあらむや山深くなる

福地 啓子

「行って来ます」と雨に駆け出す息子おり颯爽なれど弁当忘れる
吊り橋が集客になる過疎の村ざわめき終えて夕日に霞む

町田 久美子

雨滴ふぶむ緑の森に降りそそぐマイナスイオン総身に受く
つらなりて渡りゆく傘の幾つかが遠ざかりゆく長き吊橋

松木 昭子

青時雨ひととき緑溪に映えかすかに聞こゆ溪流の音
吊橋を突き刺し流る簞川湧き出すお湯と滝を集めて

丸山 孝一郎

傘を差し橋梁渡る人々の向きはひとつの朝の出動
那須野なかからくり人形踊りゐるテブコランドに慈雨の降り来る

三木 勝

ひっそりと未来に変わぬ美しさ白き雨ふる坐禅草の庭
つり橋と思えぬ程の堅固さの霧の朝を同士と渡りぬ

宮島 マツエ

大降りの屋根打つ雨音と、と、とんと変わりにて浅き眠りにつきぬ
もみじ谷静かに佇む湖に歌友なごめる吊橋の上

宮原 喜美子

霧雨に濡れてゆかうの語は遙か庭樹木うちて梅雨ふりつづく
橋上より見晴らす景色如何ならむ歌友の姿を車窓に眺む

諸 幸子

幼児は黄色の雨靴うれしそうぴちぴちやぶちやぶかけ出し行く
満々と水湛える簞ダム吊り橋たもとにこわごわ覗く

八代 陽子

梅雨晴れ的那須の高原に緑あふれ牛ら次々と牛舎より出ず
春潮の匂ふ河口の橋わたり母は一九に嫁いで来たり

山田 紀子

雨に見し妙雲寺なる石敢當魔除けに欲しき我が家にただ今
簞川ダム湖を跨ぐ大吊橋みどり濃き霧湧くなかへ消ゆ

山名 恒子

俄雨傘さしかけてくれし男性相合傘で心が濡れる
その昔吾が祖がかけし吊橋の跡が残れり今は鉄筋

湯本 いと

こわごととひたすら歩く橋の上はるか水面に水鳥親子
来年の賀状にしたく橋上の吾の姿を写してもらひし

吉岡 悠紀子

明賀屋の露天風呂は川縁り真夜の雨に流れの早き川音聞きつつ
幾重にも緑重なる溪谷の霧流るるや吊橋揺れる

渡辺 幸子

歌会報告

渋谷支部 支部長／志賀 倭子

日時 6月5日(土) 13時

場所 きゅりあん(品川区立総合区民会館)

出席 6名 出詠 6首

司会 中村 陽子

支部歌会は勉強の場なので問題提起をと話し合っています。

・イ予と八十路の歩み階段は手摺頼りて眼科への道(通ふと直したい) 志賀 倭子

イ予とは左へ行き右へ行きすること、因みに落語で衛という字は千鳥のこと、漢字の面白さ知識が増えました。

・グラス二枚隔てて向き合う 吾を見る男の列車銀河の果て行き(に向かうと直したい) 生稲 進

四月、五月と列車の歌を詠まれ、皆の意見を入れその都度作り直して今回の歌となり、その向上心に敬意、男のロマンを感じると好評でした。

出席者全員の七首詠を鑑賞して有意義な時間でした。

品川支部 支部長／久保田昭江 (吉岡記)

日時 5月20日(木) 13時～16時

場所 旗の台シルバーセンター

出席 6名 出詠 12首

司会 吉岡悠紀子

新メンバーの福永隆子さん、相模原に転居された湯本いさん、ご多忙中の月田藤枝さんも出席されて各人2首づつ出詠しました。和氣藹々の中丁寧に互評しました。

・長唄の「雨の五郎」を舞ひ終へてゆるむまなざし小学四年

・手打そば得意な母の延べ棒が宝のごとく実家に残る 福永 隆子

水戸支部 支部長／長須 正文 (深谷記)

日時 6月13日(日) 13時～15時

場所 みと文化交流プラザ

司会 深谷 充代

出席 5名 出詠 11首

ミニ講義は金子薫園の叙景詩の歌を鑑賞した。

ただ自然にしたがって、映すのみしいて人為をはさまざる、ローマン主義に対抗した作歌

歌は一人よがりにならぬ様にと批評を交え、活発な意見が多く出ました。

・玄関にぐざりと鍬の跡のこる筈二本置かれてありぬ

長須 正文 (月田記)

品川支部 支部長／久保田昭江

日時 6月17日(木) 13時～16時

場所 旗の台シルバーセンター

出席 7名 出詠 10首

司会 月田 藤枝

久しぶりに出席した月田は早速司会を勤めさせて頂くことになりました。新しく会員になられた福永さんの心ばかりの歓迎会を言うことで歌会の前にささやかな食事を致しました。其の後での歌会でしたが新会員の素的な感性の歌に合いい刺激となりこれからの励みとなりました。福永さんの歌二首

・縄文の穴より出し土偶群明日に孕める歓びに満ち

・遣はざる命の保険満額と知らせ手にする小さき歓び

福永 隆子

柏支部 支部長／末次 房江

(塚本記)

日時 6月18日(金) 12時30分～15時

場所 アミューゼ柏(D)

出席 9名 出詠 20首

司会 塚本 正子

全国大会のお話の後、歌会に入り一首を三名で批評、他に自由に質問等、時間ぎりぎりで終了。充実した歌会でした。

・旅行社へキャンセルを言う夫の声さら洗ひつつ背後に聞きぬ
山田 紀子

水戸支部 支部長／長須 正文
(塩田記)

日時 6月20日(日) 10時～12時

場所 岩間公民館

出席 5名 出詠 10首

司会 深谷 充代

梅雨の一休み、緑の中、涼しい風が吹く。里山の続く岩間

のメンバーの歌は自然の中での生活そのままが映し出され又、土浦メンバーのも周囲の人との繋がりが浮き彫りとなり、それぞれ勉強になり楽しい。

・南部鉄瓶桜の横縞が気に入りにて桜花の季節に使い初めす

久保田美智子

長須先生の御指導で歌のまとめ方がかなり良くなった。

掲示板

原田寛同人の第一歌集『ピエロの影』の書評の原稿を募集いたします。文字数は26×24行程度。尚、頒布代金一〇〇〇円は著者より太陽の舟短歌会へ寄附されます。締切は八月十日です。九月号に掲載します。

全国大会題詠「雨・橋」二首(つづき)

松岡 三夫

梅雨空の下に集ひし歌友らの熱きに燃ゆる那須塩原や
もみじ谷大吊橋のしなふ音心ゆらして微かに震ふ

森 五貴雄

小雨降る吊橋わたる足元は緑の湖面にさざ波揺れる
雨しと木々の緑が呼吸する湯煙り染めし佇む温泉宿よ

吉田 昌人

ぼんやりと灯りに浮かぶ川の面に白く糸引き露天風呂の雨
真っ直ぐに延びる吊橋もみじ谷そぼ降る雨に寂しく揺れる

庄司 久恵

臆に踏む感触のたづきなさ蒼紺の河面の光る雨後の吊橋
しっかりと連がれし橋なるに宙なる恐怖に百歩あゆめづ